

学校教育目標	視覚障がいのある児童生徒一人一人の自立と社会参加をめざし、教育的ニーズに応じた教育を行うとともに、豊かな心とたくましく生きる力を育てる。 (ミッション) 自分らしく、一人一人が輝いて生きる力を育てる。 (キーワード) 「大切に」
--------	--

今年度の重点目標	学習指導の充実及び専門性の向上 キャリア教育の推進 仲間と協力する児童生徒の育成 センター的機能の充実 児童生徒の健康と安全を守る 環境整備を通じた業務の改善
----------	--

年 度 当 初							最終結果 ( 1 ) 月		
評価項目	部科・分掌	評価の具体項目	現状	年度末の目指す姿	目標達成のための方策	評価基準	経過・達成状況	評価	次年度への方策
① 学習指導の充実及び専門性の向上	小学部	○情報を整理してまとめる力の向上を図る。	○学習の振り返りを中心に学んだことを整理したり自分の経験に置きかえたりして、発表する事を意識している。発表には慣れてきているが、自分の言葉で表現することも必要である。	○他教科の内容や既習事項を整理して自分の考えを表現することができる。	○各教科で、学んだことを関連付けるための共通の振り返りシートを活用する。  ○実態、指導方法、評価について、教科間で連携し月1回共通理解を図る。	○振り返りシートの評価 A：パターンを習得し、シートなしでも他教科の内容や既習事項が関連づいている。 B：シートの活用によって、他教科の内容や既習事項が関連づいている。 C：シートを繰り返し活用することで他教科の内容や既習事項が関連づけは始めている。 D：シートは活用しているが、他教科の内容や既習事項を関連づけることがむずかしい。	○教科共通のシートを使い、振り返りの内容を統一することで、学んだことを整理することができた。整理した情報をまとめ、自分の考えを表すことができるようになった。	B	○学習の振り返りの充実を継続して取り組み、学習内容と児童の考えを合わせた「深い学び」になるよう指導していく。児童の考えが広がったり、深まったりしやすいように、更に興味関心のある話題を提供していく。
	中学部	○分からない時や困った時に、自分で対応する力の定着を図る。	○分からない時や困った時に、自分から支援依頼ができつつある。しかし、分かっている言葉に出せなかったりすることが多い。	○合同学習等で、分からない時や困っている時に自分から周囲の人に質問したり助けを求めたりすることができる。	○困った時や分からない時には、指導者と一緒はどうすればよかったかを考える。  ○教師が模範を示したり、生徒同士でその場面について話し合いをする。  ○自立活動の時間の中で、ソーシャルスキルトレーニング等を行う。	○わからない時や困ったことに気づいたときの提示した解決方法の評価 A：提示した方法が実態に合い、般化にむずびついている。 B：提示した方法は実態に合い、実践に結び付いている。 C：提示した方法は実態にあったが、定着に結び付いていない。 D：提示した方法が実態に合わず、理解に結び付いていない。	○学習時に、困った事や分からない事について教師に支援依頼を求めることがほぼできた。課題と感じる生活場面を抽出し、自立活動等の時間にソーシャルスキルトレーニングを行い、言動を振り返ることで、次回からは、場面にふさわしい言動をとることができ、般化にも繋がりがつつある。	B	○教師と一緒に考え、確認した言動ができた時に、振り返りカードなどで評価をわかりやすくし、意欲付けを図る。 ○相談や支援依頼したことが自分にとって良かったと思えるように意図的に場面をとらえるようにする。
	高等部 普通科	○課題に対する意識の向上と解決に向かう力の育成を図る。	○卒後の生活をイメージして学習に取り組んでいるが課題を認識し、解決する力を身に付けるまでは至っていない。	○自ら課題を認識し、解決に必要な力を身に付けている。	○モデルとなる人や事例紹介を通じて課題解決の過程を学習する。  ○課題について生徒と話し合い、解決への取り組みをP D C Aサイクルで進める。  ○生徒の課題認識、解決に取り組む状況に関する情報交換を行い、指導・支援に活かす。	○課題認識と解決への取り組みの評価 A：自己課題を認識し、解決に必要な力を身に付けている。 B：自己課題を認識し、解決に必要な力を身に付けつつある。 C：自己課題を認識しつつあり、解決に必要な力を身に付ける意欲がある。 D：自己課題の認識と解決に必要な力を身に付ける意欲を持つことができない。	○障がい者に関するニュースを紹介したり、自分に置き換えて話し合う機会を持ったりしたことで、課題への意識が高まった。 ○「思いやりあるやり取り」を学部全体の課題として取り上げたことで、生徒間のよい言葉かけや態度が見られるようになった。	B	○他者の立場を考えながら発言したり、行動したりできているか、動画等を活用して振り返りをする。 ○生徒が常に課題を意識して生活するように声かけをしたり、掲示等の工夫をしたりする。
高等部 保健 医療科	○各生徒の学習方法の確立と確かな知識の定着を図る。	○生徒は、自分に合った学習方法を確立し、効率的な学習をすることで内容の定着を図るということが課題となっている。	○生徒は、I C T機器を活用したり、自分に合った覚え方を選択工夫したりしながら、積極的に学習に取り組み専門的知識が定着している。	○理解定着を促すために、授業構成の工夫、I C Tを活用した教材の提示、覚え方の助言などを行い、生徒が自分に合った方法を選択・実践できるようにする。	○各学習の中でI C T機器の活用を通じた学力定着の評価 A：生徒の実態に合ったものになっており、学習内容の理解定着と学力の向上がみられる。 B：生徒の実態に合ったものになっており、学習内容の理解定着がみられつつある。 C：生徒の実態に合ったものになっており、学習内容の理解定着に向けて努力している。 D：生徒の実態に合ったものになっておらず、学習内容が定着していない。	○生徒の実態を踏まえ、タブレットのUDブラウザやブレイクトークによる音声デイジー等、I C T機器の具体的な使用方法や学習のための活用場面の提示と指導を行った。生徒は、それらの中から自分に適した学習手段を選択して自主学習に取り組んでおり、学習内容の理解定着につながっている。	B	○応用的な学習にI C T機器を活用できるよう、今後も学習の場面や使用方法を具体的に提示したり、指導したりすることで、学力向上につなげていく。	

① 学習指導の充実及び専門性の向上	専攻科	○生徒の見え方等と学びの実態に応じた学習支援を行い学んだ知識の理解定着を図る。	○生徒は、専門的な学習内容の理解に時間を要し、定着についても十分な到達に至っていない。 ○専門的な知識の定着・応用力の育成につながる指導・支援の継続、充実が重要である。	○実力テストの平均点が8割以上である。	○放課後、夏季・冬季休業中の補習を実施する。 ○週1回の理療科会を開催し情報共有を行う。 ○予習・復習を推奨する。 ○ICT機器等の視覚を補う技能の指導を行う。	○実力テストからの評価 A：生徒の実力テストの平均点が8割を超える B：生徒の実力テストの平均点が7割を超える C：生徒の実力テストの平均点が6割を超える D：生徒の実力テストの平均点が6割未満	○放課後や冬季休業中に補習を実施し、既習内容の復習に取り組んだ。「繰り返して学ぶことで定着につながる」「様々な学習資料が役に立った、見え方に合った提供で、これからもお願いしたい」などの感想が生徒から上がった。	B	○生徒一人一人の学ぶ力としての課題（文章の読み取り暗記など）を意識した教材や授業、補習内容の工夫を行う。
		○各科目等での横断的な指導・支援を行い知識の活用・応用力の向上を図る。		○学んだ知識を他の単元や科目の学習で活用・応用することができる。	○各科目等横断的指導の年間計画に基づき、知識を活用して思考する場面を設定する。 ○生徒同士が、学年を超えて学び合う学習を設定する。 ○授業の効果・課題を職員間で共有する。 ○生徒による授業へのアンケートを実施する。	○各授業の学習活動における知識の活用・応用力の目標到達度で評価 A：観点別評価での思考・判断の到達度は8割以上の達成である。 B：観点別評価での思考・判断の到達度は7割以上の達成である。 C：観点別評価での思考・判断の到達度は6割以上の達成である。 D：観点別評価での思考・判断の到達度は6割未満である。	○生徒自身が、学んだことを科目を超えて使ったり、繋げて考えようとする姿が増えている。 ○2学期末の合同学習では同じテーマに沿って、生徒がそれぞれ発表した。その後も次のテーマについて、職員も一緒に、学んだ知識を使い学習を深めていった。生徒からは、「人に話したり、自分で調べて準備したりすることで、長期記憶になっている」「学んだ知識を活用する力は少しずつ身に付いてきている」という声が上がっていた。	B	○部科会や教科会で、生徒の様子や授業の課題や状況について共有し、授業改善に取り組む。
	教務部	○新学習指導要領の改訂の要点について周知を図る。	○平成29年度より改訂の要点について読み合わせ等を行っている。小中学部授業の担当者は半数以上が改訂を意識して取り組んでおり、高等学校学習指導要領に関して関心の高まりが見られる。平成31年2月告示の特別支援学校高等部学習指導要領について共通理解が必要である。	○特別支援学校高等部学習指導要領の改訂について職員の3/4以上が理解している。	○部科会で特別支援学校高等部学習指導要領を読み合わせる。 ○疑問や実施に向けた具体案を集約し職員で共有する。 ○教育課程研究集会等への参加を呼びかける。 ○改訂に関する情報を提供する。 ○学習指導要領に関するアンケートを2回実施する。	○アンケートからの評価 A：学習指導要領に関するアンケートで「改訂の要点が分かった」の回答数が全体の3/4以上 B：学習指導要領に関するアンケートで「改訂の要点が分かった」の回答数が半数以上 C：学習指導要領に関するアンケートで「改訂の要点が分かった」の回答数が半数未満 D：学習指導要領に関するアンケートで「改訂の要点が分かった」の回答数が1/4未満	○改訂の要点をまとめた資料を作成し、月1回部科会での周知を継続した。アンケートの結果によると、約7割の職員が理解を進めることができたと回答した。一方で、理解が難しいとの回答もあった。	B	○学習指導要領の理解・周知については、今後も継続的な情報提供等の取り組みを行い、各自の理解を進めることへつなげていく。また来年度より完全実施の小学校学習指導要領に対応できるように、諸表簿の様式の改善とともに学習指導・評価の充実を図る。

様式 2

① 学習指導の充実及び専門性の向上	教育研究部	○各教科・科目等での横断的な指導・支援を図り、授業の工夫改善に取り組む。	○教科・科目間の横断的な取組が進んではきているが、まだ、組織的な取組みとまでは至っていない。	○校内研究での「学んだ知識・技能をつなげ、展開・応用する授業」への取組が組織的なものとなっている。	○年間 8 回のグループ別研究会、1 回の全体報告会の実施 ○年間 3 回の授業研究会の実施 ○指導主事による指導	○めざす姿に対する職員アンケートにより、研究・授業改善について成果を感じたと答えた職員の割合で評価 A：3 分の 2 以上の職員 B：半数以上 3 分の 2 未満の職員 C：3 分の 1 以上半数未満の職員 D：3 分の 1 未満の職員	○3 年間の校内研究が終了したことを受けて、年度末の報告会では、成果と課題について共有し、併せて来年度からの研究主題について協議を行う予定である。 ○職員アンケート結果は次の通りである。 ①めざす授業に対する取組（研究）について ・組織的になっている（32%） ・やや組織的になっている（68%） ②児童生徒のめざす姿に対して ・増えている16% ・やや増えている84%	A	○引き続き、授業改善や研修研究を通して、組織的に取り組む。 ○部科会で授業改善への話し合いを持ち、さらに組織的な取組にしたい。 ○来年度からは新たな研究主題での研究を開始し、学部や部科でのグループ分けにしたい。
		○教職員が自ら研修を企画・実施することで専門性の向上を図る。	○職員の専門性に関する意識調査では39.3%が「概ね分かる」「実践があるまたは他の人へ研修等を行うことができる」と回答している（H31末39.5%）	○担当する視覚障害教育の分野についての知識が深まり、研修を行うことができる。	○校内研修を年間約20回、視覚障がい教育に関する内容を中心に7分野に分けて実施する。 ○3 年目以降の教職員は担当分野についての研修を 2～3 回担当する。	○専門性に対する意識調査 1～4 の内容 1：ほとんど分かっていない、 2：少し分かる、 3：概ね分かっている、 4：実践がある、又は、研修等を行うことができる。 上記の内容について下記の割合で評価 A：3. 4. を合わせた職員の割合が50%以上。 B：3. 4. を合わせた職員の割合は40%以上50%未満。 C：3. 4. を合わせた職員の割合は30%以上40%未満。 D：3. 4. を合わせた職員の割合は30%未満。	○担当職員が工夫をしながら研修を実施した。アンケートでは、校内の指導事例をもとにした研修の評価が高かった。中でも自立活動の研修で、県の指導主事から年間 3 回、基礎から校内の実践事例についての指導・助言を受けた研修は、最も評価が高かった。 ○アンケートでは「視覚障がい教育に関する専門性の意識」を「3、4」と答えた職員は54.1%であった。（5 年前の研修開始時は 22.3%）	A	○研修内容の充実に向けて、今年度の担当者での振り返りと検討を行い、引継ぎ事項の確認、来年度の新着任者の研修内容を計画する。 ○全員研修では、事例研修を中心に計画する。外部から指導助言者を招聘し、より専門性の向上を図り、児童生徒に還元できるようにする。 ○専門性のアンケートは今年度で終了とする。
		○児童生徒のICT機器活用能力の向上を図る。	○児童生徒には、一人一台のiPad、教室にはPCが設置されている。活用能力は児童生徒の実態や入学してからの期間により差があるものの、学習で積極的に活用するとともにICT機器の活用力を高めたいと向上心をもって取り組む姿が見られる。	○児童生徒は、目的に沿ったICT機器の活用に取り組む、技能も向上している。	○ICT指導記録の作成 ○ICT指導実践報告会の実施 ○校内パソコン検定、日本情報処理検定協会の日本語ワープロ検定受験の計画・実施	○児童生徒のICT機器の活用能力について、指導者の評価により評価 A：自己目標を達成した児童生徒は100%。 B：自己目標を達成した児童生徒は80%以上。 C：自己目標を達成した児童生徒は60%以上。 D：自己目標を達成した児童生徒は60%未満。	○「児童生徒のICT機器活用能力の目標達成について」アンケート結果 ・達成（20%） ・おおむね達成（60%） ・向上しつつあるが個々の目標の達成に至っていない（20%）	B	○児童生徒の必要性や個々の実態に応じた機器の活用など、より個に合わせた活用を考えていく必要がある。 ○来年度はタブレットの更新もあり新しい端末になるため、操作方法や使い方を改めて考えていきたい。
② キャリア	小学部	○計画性を身に付けて取り組めるようにする。	○一日の予定を確認し、行動することができるが、数日先になると見通しが持ちづらい。	○作成したスケジュール表を確認し、活動に取り組むことができる。	○スケジュール表の内容を児童と一緒に考える。 ○スケジュールを短期間から徐々に伸ばしていく。 ○定期的に振り返りの機会を作る。	○スケジュール表の評価 A：常にスケジュール表を活用し、見直しをもって取り組むことができる。 B：スケジュール表を活用する機会を設定すると、見直しをもって取り組むことができる。 C：折を見てスケジュール表の活用を促すと、取り組むことができる。 D：スケジュール表を活用したが、取り組むことが難しい。	○スケジュール表の内容について、修正を重ねながら、徐々に期間を伸ばしていったことで、数週間先までの見直しをもって、活動に取り組めるようになった。	A	○身に付けたスケジュールの管理を土台に、中学部では定期考査に備えての勉強等をさらに計画的にできるよう指導していく。

様式 2

教育の推進	中学部	○自己認識ができ、将来へ向けた取り組みができる。	○中学部卒業後、どうしたいのか考えることができつつある。しかし、それに向けて具体的に何をしたらよいか、自分の課題は何かについて十分にこたえられていない。	○中学部卒業後の生活にイメージを持ち、自分の課題に取り組んでいる。	○作業学習や高等部体験入学や現場実習を通して、自分のよさや、課題について考える機会を多くする。  ○各教科の中で、進路学習やキャリア教育につながる内容を意識して取り入れる。	○指導支援が自己認識に結び付いたかどうかで評価 A：自分のよさや課題に気づき、自分からほかの人に伝えている。 B：自分のよさや課題に気づいているが、自分からは伝えられない。 C：自分のよさや課題に気づきつつある。 D：自分のよさや課題に気づいていない。	○「自分ノート」作りなど、自分のよさや課題について考える学習を行った。進路先についても、生徒の思いを聞いたり、ホームページを利用して、他校の学校案内を一緒に見たりして、進路先決定の参考にした。	B	○進路にかかわる学習活動の取り組みの一つとして「自分ノート」作りを継続して行うとともに、自立活動の時間で自分の課題に向き合ったり、総合的な学習の時間を通して将来の生き方を考えたりする。	
	普通科	○キャリア教育の実践に取り組む。	○産業現場等における実習を通じて働く意味の理解や自己理解を進めているが、まだ卒業後の過ごし方や就労についてのイメージを十分につかめていない。	○生徒は自分の特性を理解して、自分に合った進路について考えており、卒業後の生活について見通しを持っている。	○自立活動を中心に各教科領域等を関連づけながら、自己理解を進める学習を計画的に行う。  ○卒後の生活に必要な支援をまとめたサポートブックを作成する。	○サポートブック作成に係る評価 A：サポートブックをもとに、自分で必要な支援について校外の関係者に説明できる。 B：サポートブックをもとに、自分で必要な支援について校内の関係者に説明できる。 C：自己理解をもとにサポートブックを作成している。 D：自己理解が進まず、サポートブックの作成に取り組むことができない。	○ハローワークの助言を参考に、自己紹介や支援内容をA4用紙1枚にまとめ、打ち合わせ等で活用した。 ○支援の必要性などの理解は進んだが、実際のやりとりにおいて自分の意思を伝えたり、相談したりすることができない時もあった。	B	○将来の就労、生活に向けてハローワークや就労・生活支援センター等の関係機関と連携して進路に関する学習を行う。 ○サポートシートの内容が簡潔に説明できるように準備していく。	
②キャリア教育の推進	高等部	保健医療科	○進路目標の具体化につながる体験活動や指導の充実を図る。	○生徒が職業意識を持って専門的知識・技術を習得し、国家資格取得を果たすためには、理療の意義職域などを体験的に学んだり、情報を得たりすることで、自分の将来像を考え、進路目標を早期に具体化することが重要である。	○教職員は、生徒の進路の具体化につながるような見学や実習の場を積極的に計画・実施するとともに、進路決定に有益な情報を提供している。  ○生徒は、見学や実習、進路情報の収集を通して進路目標を具体的に定め、資格取得に向け、意欲的に学習に取り組んでいる。	○生徒のニーズに応じて、ねらいを明確にした職場見学等を企画・実施するとともに、見学の振り返りを充実させることで、進路の具体化につなげていく。  ○授業やLHRの中で体験活動を振り返り、得た成果や自己の進路先、進路実現に必要な課題などについて考えたり、話し合ったりする場を設ける。	○懇談や進路相談の結果からの評価 A：生徒が自己の進路を考え、進路決定につながっている。 B：生徒が自己の進路を具体的に考えている。 C：生徒が自己の進路を考える参考になっていない。 D：生徒が自己の進路を考えるには不十分である。	○資格取得後の進路を具体化するための職場見学を行ったり、見学に向けた事前指導、事後の振り返りを充実させたりすることで、生徒は資格取得後の進路や将来への見通しについて具体的に考えるようになった。	B	○進路先の具体化のために、職場見学の実施や情報の提供、相談を計画的に実施する。
		支援部	○個に応じた進路情報の提供と、進路実現に努める。	○卒業生が少ないためモデルとなる事例が少なく、進路に関する情報量が少ない。  ○進路選択・進路決定の際就労定着支援員が関わるようになり、情報が入手しやすくなった。	○卒業生や他校の進路選択の例等をもとに、実習先選びや進路決定に役立てている。  ○生徒は、見学や実習、進路情報の収集を通して進路目標を具体的に定め、資格取得に向け、意欲的に学習に取り組んでいる。	○就労定着支援員、ハローワーク等関係機関と連携を図る。  ○懇談等で、生徒・保護者を交えて話し合う機会を設けお互いの意思を確認する。  ○キャリア教育講演会の実施	○情報活用に係る評価 A：得た情報を、進路先や実習先選びに役立てている。 B：自分の適性に合った事業所等について、情報を得ようとしている。 C：卒業後や自分の将来について、適性を知る。 D：卒業後や自分の将来について、関心を持ち始めている。 E：卒業後や自分の将来について関心がない。	○個々に必要な進路情報（見学の実施、体験）を提供し進路選択の幅が広がるようにした。得た情報をもとに自分に合った進路先を選んでいる姿が見られる生徒がいた。学齢・学年に応じて進路への関心度に差があった。	B	○進路に関心を持ったり、自分で決めたりできるよう、学齢・学年にあった進路情報の提供を行う。圏域を超えた就労定着支援員、東中西ハローワーク、市町村等の関係機関との連携を充実させる。
		○キャリア教育学習プログラムの重点課題について全職員での共有する。	○児童生徒がキャリア教育の重点課題の解決に向け意識して取り組んではいるが、解決まで至っていない。	○児童生徒が、キャリア教育学習プログラムの重点課題を意識し課題の解決に取り組む解決に向かっている。	○重点課題の共通理解を図り解決に向けた授業を工夫するよう働きかける。	○自己の課題解決にかかわる評価 A：重点課題の解決に向けて取り組み、解決に向かっている。 B：重点課題の解決に向け、自分から取り組んでいる。 C：アドバイス等を参考に、重点課題の解決に向け取り組んでいる。 D：重点課題は意識しているが、解決に向けて取り組んでいない。 E：自分の重点課題が何か、わからない。	○課題や目標を掲示することで、意識して指導にあたった生徒は、アドバイスを参考に、課題解決に向け取り組んでいたが、自分から主体的に取り組む姿勢は多くはなかった。アドバイスを受けると前向きに課題解決に取り組んでいた。	B	○課題や目標をいつでも確認したり意識したりできるよう、早い段階から掲示していく。キャリア教育プログラムの実践シートの活用をすすめる。	

様式 2

	寮務部	○卒業後を見据え、自立した生活を送るよう主体性を育む。	○個別の教育支援計画をもとに、舎生一人一人の障がい特性を理解し、社会自立へ向けての指導支援を行っている。	○実態把握を職員全体で共有し、舎生の主体的な行動を引き出すような教育活動が展開されている。	○舎生に寄り添い、観察し、保護者保証人、部科との連携を密にすることで、情報を共有し、舎生の主体性を育むための生活指導・支援について、職員全体で創意工夫し、共有、実践する。	保護者・保証人、学部と連携し、個々の課題を共有・実践することで、舎生の主体的に行動する姿が（に） A：定着している。 B：つながっている。 C：つながりつつある。 D：共有・実践することが不十分で、舎生の主体的に行動する姿を引き出せていない。 E：共有・実践することができず、舎生の主体的に行動する姿につながっていない。	○保護者・保証人、部科との連携をすばやく行い、環境の整備、支援方法の工夫により、舎生が主体的に行動する姿につながった。	B	○部科、関係機関との連携を効率的にできるよう、さらに整理し、関係者で指導・支援方法を共有することで舎生の自立や社会参加できる力につなげていく。
③ 仲間と協力する児童生徒の育成	小学部	○自分や他者の意見をまとめながら話し合いを進める力を育成する。	○教師との話し合いでは、積極的な発言と、他者の意見を傾聴する様子が見られるが、児童生徒同士では、主体的に発言する場面が少ない。	○児童生徒の話し合いで自分の意見を伝えたり相手の意見を聴き取ったりして、話し合いを主体的に進めることができる。	○進め方のポイントを確認し共有する。  ○進め方に困った場合には選択肢を示す。  ○話し合いの機会を多く設ける。	A：他者や自分の意見をまとめて、話し合いを主体的に進めることができる。 B：自分や他者の意見をもとに話し合いに積極的に参加することができる。 C：教師の促しを受けて、意見を聞いたり言ったりすることができる。 D：教師と一緒に考えて、意見を言うことができる。	○行事等についての児童生徒全員の話し合いでは、他の人の意見を参考にして、自分の意見を伝える様子が見られた。	B	○話し合いを主体的に進める力をつけるために、話し合いの機会を多く設定し、教師がモデルを示していく。
	中学部	○相手の気持ちを考えた発言や行動が身につくよう、仲間と協力する機会を設定する。	○自分の思いやしたい行動を伝えることができつつある。しかし、その時の気分や自分の思いと異なる時に、不適切な行動や表現になることがある。	○教師がいない時や、休憩時間に相手のことや気持ちを考えたり、行動したりしている。	○気持ちよく生活するためにどうしたらいいか、クラスのルールを決める場面を設定する。  ○学級活動の中で、学校生活を気持ちよくするためにはどうすればいいか話し合う機会を設定する。	○学級で考えたルールを実践する姿から評価 A：ルールを守って自主的に行動している。 B：ルールを守ろうとしている。 C：教師の促しを受けながら、ルールを守って行動している。 D：ルールを忘れ、促しても守ることができない。	○定期的に学級目標の振り返りを行い、自分や友だちの言動について伝え合った。自主的に友だちのサポートをしたり、言葉かけをしたりする姿につながった。	A	○今後も学級ルールの見直しを適宜行い、生徒が主体的に相手のことを考えられる場面を設定する。
	高等部 保健医療科	○LHR等の企画・運営を通じた仲間づくり	○保健医療科生徒は異なった年齢層で構成されている。互いを仲間として協力しながら、様々な活動を自発的に発案・運営していくことが必要である。	○教職員は、生徒が行事の企画・運営において互いに協力し、自発的に取り組めるよう、適切な助言・支援を行っている。  ○生徒は、様々な行事・活動において、協力しながら、自主的・積極的に企画・運営している。	○学校行事、LHRなどで、生徒が活動内容を考えたり互いに協力しながら運営したりする場を設定する。  ○LHRでは、学期に1・2回、生徒が自由に活動内容を発案・運営する機会を設定する。	○学校行事、LHR等の企画・実行に係る評価 A：生徒は互いに協力し、自分たちで企画を自主的・積極的に立案・実行している。 B：生徒は互いに協力し、提案された企画を自主的・積極的に実行している。 C：生徒は互いに協力し、提案された企画の実施に協力して取り組んでいる。 D：生徒は提案された企画の実施に消極的である。	○異年齢の生徒同士の仲間づくりはできており、児童生徒会行事の企画にアイデアを出すなど協力的である。保健医療科のLHRでは、提案されたことを具体化し協力しながら取り組んだ。	B	○他学部の児童生徒とのかかわりも大切にしながら、生徒が自由なアイデアを出し意欲的に活動できる場面を設定していく。
	指導部	○児童生徒会行事に児童生徒が主体的に参加し、充実した内容となる。	○児童生徒会行事を楽しみにして、自分の役割を教師と一緒に果たそうとしている。  ○行事の準備では、昼休憩などを活用して生徒たちが予定を組み、話し合いをする様子が見られるようになってきた。  ○児童生徒数が少ないので教師主体の行事づくりになりがちである。	○生徒の意見が多く反映された行事内容となり、児童生徒が自分らしくいきいきと行事に参加している。	○行事前には担当の児童生徒と職員が話し合う場を確保する。	A：全ての行事の事前に話し合いが持たれ、児童生徒の意見が十分に反映された行事内容となっている。 B：8割の行事の事前に話し合いが持たれ、児童生徒の意見が多く反映された行事内容となっている。 C：6割の行事の事前に話し合いが持たれ、児童生徒の意見が少し反映された行事内容となっている。 D：4割の行事の事前に話し合いが持たれ、児童生徒の意見が少し反映された行事内容となっている。 E：全ての行事の事前に話し合いが持たれず、児童生徒の意見が反映された行事内容になっていない。	○児童生徒が行事前に話し合いの時間を確保できるように指導部の行事担当が時間調整の補助を行った。昼休憩に話し合いを行うことが多かったが、児童生徒は前向きに参加し、意見交換をして、話し合いができた。	A	○企画段階から児童生徒が関わり、今まで以上に児童生徒の意見が反映された児童生徒会行事となるよう、年度初めに児童生徒の行事担当を決定する。

		<ul style="list-style-type: none"> <li>○児童生徒会行事に児童生徒が主体的に参加し、充実した内容となる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○児童生徒会行事を楽しみにして、自分の役割を教師と一緒に果たそうとしている。</li> <li>○行事の準備では、昼休憩などを利用して生徒たちで予定を組み、話し合う様子が見られるようになってきた。</li> <li>○児童生徒数が少ないため教師主体の行事づくりになりがちである。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○生徒の意見が多く反映された行事内容となり、児童生徒が自分らしくいきいきと行事に参加している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○行事後には児童生徒と職員向けのアンケートを取り、結果を考察して次年度へ生かす。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>A：全ての行事の事後にアンケートが実施され、次年度への検討が十分にされている。</li> <li>B：8割の行事の事後にアンケートが実施され、次年度への検討がなされている。</li> <li>C：6割の行事の事後にアンケートが実施され、次年度への検討がなされている。</li> <li>D：4割の行事の事後にアンケートが実施され、次年度への検討がなされている。</li> <li>E：全ての行事の事後にアンケートが実施されず、次年度への検討がなされていない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○行事後には児童生徒、職員向けのアンケートをとり、結果と次年度への引継ぎ事項を指導部で検討し、職員会に提案した。</li> </ul>	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>○行事内容が今年度以上に充実するよう、今年度の行事の反省、引継ぎ事項を来年度に確実に引き継ぐ。</li> </ul>
④センター的機能の充実	支援部	<ul style="list-style-type: none"> <li>○各市町村や視覚障がい関係機関との連携を推進する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○様々な見え方、学習状況に対応した総合的な支援が求められている。</li> <li>○平成30年度、鳥取県視覚障がい支援センターが設置、今年度は医大にロービジョンクリニックができるなど視覚障がいの相談や支援の場が広がっている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○関係機関と連携しながら視覚障がいの乳幼児や児童生徒、その保護者や関係者の多様なニーズに応じて支援を推進している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○鳥大病院眼科視能訓練士と連携して支援を行う。</li> <li>○該当市町村の担当者等と連絡を取り合う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>A：関係機関と連携しながら、校内の人材等を活用し多様なニーズに応じた支援を推進している。</li> <li>B：関係機関と連携し、校内の人材等を活用し、ニーズに応じた支援を推進している。</li> <li>C：校内の人材等を活用し、ニーズに応じた支援を推進している。</li> <li>D：ニーズに応じた支援を推進している。</li> <li>E：ニーズに応じた支援が推進できていない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○眼科医会によるスマートサイトの立ち上げに伴い、眼科医、視能訓練士等の医療従事者との連携を持つことができた。</li> <li>○年中・年長児の居住区の就学担当と連携し、保護者とともに教育相談、学校見学等を実施した。</li> <li>○見えにくさのある幼児・児童・生徒が在籍する園や学校の依頼に応じ、環境の整備、支援方法の提案、グッズ等の情報提供を行った。</li> <li>○依頼に合わせ、校内人材や情報を活用して対応した。</li> <li>○東中西の特別支援教育連絡会でLD等相談員等と支援の状況や成果と課題等について情報交換を行った。</li> <li>○見え方に応じた支援について、本校職員で事例検討を行い、支援に生かした。</li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>○該当幼児児童生徒の居住地の市町の就学担当や鳥取大学医学部眼科、視覚障がい支援センター等と引き続き連携をしていく。</li> <li>○依頼等のない市町等へもこちらからかわりを持ち、支援が必要な時にすぐに対応できるようにしておく。</li> <li>○LD等相談員等との連携をさらに密にして、視覚障がい以外にも見え方の困難さを抱える児童生徒への改善へのアプローチをすすめていく。</li> <li>○校内研等で教育相談の事例検討を行い、見えにくさへのよりよい対応・支援方法を模索する。</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>○乳幼児支援、弱視児童生徒支援を推進する。</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>○相談・支援前後に、担当者で情報共有を行い支援の方法や方向性を協議する。</li> <li>○相談・支援の記録を必要に応じて共有する。</li> <li>○弱視学級や弱視児童生徒の在籍校や園等を訪問する。</li> <li>○支援先に本校の取組や、学習支援の工夫やグッズ、環境整備等について情報を伝える。</li> <li>○支援後の状況の変化を把握する。</li> </ul>				
		<ul style="list-style-type: none"> <li>○視覚障がい理解を推進する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○県内の学校や、市町村からの研修依頼がある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○校内の人材等を活用し、要請等に応じた研修や情報提供を行っている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○校内の人材等を活用し、要請等に応じた研修や情報提供に努める。</li> <li>○研修会後、参加者の感想等を集約する。</li> <li>○盲学校体験ツアーを広報し実施する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>A：ニーズに応じて校内の人材等を活用し、参加者の満足いく研修等を実施している。</li> <li>B：ニーズに応じて校内の人材等を活用し、研修等を実施している。</li> <li>C：ニーズに応じた研修等を実施している。</li> <li>D：研修等を行っている。</li> <li>E：ニーズに応じた研修が実施できていない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○依頼に合った研修内容を選び、校内の人材や情報を活用して研修等を行った。</li> <li>○鳥取県ロービジョン研修会や鳥取県養護教諭の研修会でロービジョンや視覚障がい教育の拠点としてのセンター的機能、関連機関についての情報提供を行った。</li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>○本校のホームページやちらし、研修会等の場を通して「見えにくさ」の気づきにつながるように、また、視覚障がいへの理解が進むよう、引き続き本校のセンター的機能の周知を図る。</li> </ul>

様式 2

<p>⑤ 児童生徒の健康と安全を守る</p>	<p>指導部</p>	<p>○校内研修を実施する。 ○実践的な避難訓練を実施する。 ○専門家による研修を実施する。</p>	<p>○視覚障がいという特性を考慮したより安全な校内環境の整備や、防災の観点から実践的な避難訓練を行い、安全で安心な生活を送ろうとする意識を高めたり、危険を回避する実践力を育てる必要がある。</p>	<p>○校内安全環境を防災の観点から点検・改善している。 ○防災教育により児童生徒、教職員の意識が高まり具体的な行動につながる。</p>	<p>○様々な場面を想定した実践的な校内研修や避難訓練を実施する。 ○専門家による防災に関する研修を実施する。 ○アンケートによる児童生徒教職員の意識調査を実施する。</p>	<p>○児童生徒および教職員に対するアンケート調査で評価 A：安全に対する意識が高まったとの回答が100% B：安全に対する意識が高まったとの回答が80% C：安全に対する意識が高まったとの回答が60% D：安全に対する意識が高まったとの回答が40% E：安全に対する意識が高まったとの回答が30%</p>	<p>○避難訓練を年3回実施し、専門家から研修や指導、助言を受けた。 ○移動介助の研修、AEDの研修、毎月の安全点検を実施した。 ○児童生徒、職員ともに安全に対する意識が高まったと100%回答している。</p>	<p>A</p>	<p>○来年度も様々な場面を想定した実践的な避難訓練を実施していく。（引き渡し訓練等） ○警察、消防の他、防災アドバイザーなど外部講師による安全教育を実施していきたい。</p>
<p>⑥ 環境整備を通じた業務の改</p>	<p>教頭</p>	<p>○時間外業務の軽減を図る。</p>	<p>○勤務時間外の業務内容の内訳をみると、分掌業務に時間を多く費やす傾向がみられる。</p>	<p>○業務内容の偏りが少なくなり、勤務時間外が減る傾向がみられる。</p>	<p>○時期により、比較的余裕のある職員が「お手伝いできます。」等の状態を表示し仕事を分担しやすくする。</p>	<p>○時間外業務実績のうち、分掌業務にかかる時間の減り方について評価をする。（1か月単位） A：5時間減った。 B：4時間減った。 C：3時間減った。 D：ほとんど変化しなかった。</p>	<p>○2学期以降は、時間外業務が長時間必要となるような学校行事はなかったこともあり、ほぼ適切と思われる時間で多くの職員が帰宅できていた。 ○時間外勤務業務が長時間傾向にあった職員に対して、業務への取り組み方を見直してらもうことで、改善に向かった。</p>	<p>B</p>	<p>○来年度も継続的に各職員に放課後や空き時間の使い方を工夫するように呼び掛ける。 ○時間外業務の時間が月40時間以上になった職員に対しては、その理由を確認したり、仕事の分担に偏りが無いかなどを話し合ったりしながら時間外業務の削減につなげる。</p>

評価基準 A：十分達成 B：概ね達成 C：変化の兆し D：まだ不十分 E：目標・方策の見直し

[100%] [80%程度] [60%程度] [40%程度] [30%以下]